

二人の役人

宮沢賢治

青空文庫

その頃の風穂かぜほの野のはらは、ほんたうに立派でした。

青い萱かやや光る茨いばらやけむりのやうな穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗くりの木やはんの木の小さな林もありました。

野原は今あはは練兵場や粟の畑なへばたけや 苗圃なへばたけなどになってそれでも騎兵の馬が光つたり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通つてもなかなか奇麗ですけれども、前はまだまだ立派でした。

九月になると私どもは毎日野原に出掛けました。殊に私は藤原慶次郎といつしよに出て行きました。町の方の子供らが出て来るのは日曜日に限つてゐましたから私どもはどんな日でも初はつたけ蕈たけや栗をたくさんとりました。ずるぶん遠くまでも行つたのでしたが

日曜には一層遠くまで出掛けました。

ところが、九月の末のある日曜でしたが、朝早く私が慶次郎をさそつていつものやうに野原の入口にかゝりましたら、一本の白い立札がみちばたの栗の木の前に出てゐました。私どもはもう尋常五年生でしたからすらすら読みました。

「本日は東北長官一行の しゅつごう 出遊につきこれより中には入るべからず。東北庁」

私はがっかりしてしまひました。慶次郎も顔を赤くして何べんも読み直してゐました。

「困つたねえ、えらい人が来るんだよ。叱しかられるといけないからもう帰らうか。」私が云いひましたら慶次郎は少し怒つて答へまし

た。

「構ふもんか、入らう、入らう。こゝは天子さんのところでそんな警部や何かのどこぢやないんだい。ずうつと奥へ行かうよ。」

私もにはかに面白くなりました。

「おい、東北長官といふものを見たいな。どんな顔だらう。」

「鬚ひげもめがねもあるのさ。先せんころ頃来た大臣だつてさうだ。」

「どこかにかくれて見てようか。」

「見てよう。寺林のところはどうだい。」

寺林といふのは今は練兵場の北のはじになってゐますが野原の中でいちばん奇麗な所でした。はんのきの林がぐるつと輪になつてゐて中にはみじかいやはらかな草がいちめん生えてまるで一つ

の公園地のやうでした。

私どもはそのはんのきの中にかくれてゐようと思つたのです。

「さうしよう。早く行かないと見つかるぜ。」

「さあ走つてかう。」

私どもはそこでまるで一目散にその野原の一本みちを走りました。あんまり苦しくて息がつけなくなるととまって空を向いてあ
るき又うしろを見てはかけ出し、走つて走つてたうとう寺林につ
いたのです。そこでみちからはなれてはんのきの中にかくれまし
た。けれども虫がしんしん鳴き時々鳥が百匹ひゃくも一かたまりになつ
てぎあと通るばかり、一向人も来ないやうでしたからだんだん私
たちは恐こはくなくなつてはんのきの下の萱かやをがさがさわけて初はつたけ茸

をさがしはじめました。いつものやうにたくさん見附かりましたから私はいつか長官のことも忘れてしきりにとつて居をりました。

すると俄にはかに慶次郎が私のところにやって来てしがみつきました。まるで私の耳のそばでそつと云つたのです。

「来たよ、来たよ。たうとう来たよ。そらね。」

私は萱の間からすかすやうにして私どもの来た方を見ました。

向ふから二人の役人が大急ぎで路みちをやって来るのです。それも何だかみちから外それて私どもの林へやって来るらしいのです。さあ、私どもはもう息もつまるやうに思ひました。ずんずん近づいて来たのです。

「この林だらう。たしかにこれだな。」

一人の顔の赤い体格のいゝ紺の詰えりを着た方の役人が云ひました。

「うん、さうだ。間違ひないよ。」も一人の黒い服の役人が答へました。さあ、もう私たちはきつと殺されるにちがひないと思ひました。まさかこんな林には気も付かずに通り過ぎるだらうと思つてゐたら二人の役人がどこかで番をして見てゐたのです、万一殺されないにしてももう縛られると私もは覚悟しました。慶次郎の顔を見ましたらやっぱりまっ青で唇くちびるまで乾いて白くなつてきました。私は役人に縛られたときとつた蕈きのこを持たせられて町を歩きたくないと考へました。そこでそつと慶次郎に云ひました。

「縛られるよ。きつと縛られる。きのこをすてよう。きのこをさ

。」「
慶次郎はなんにも云はないでだまつてきのこをはきごのまゝ棄す
てました。私も籠かごのひもからそつと手をはなしました。ところが
二人の役人はべつに私どもをつかまへに来たのでもないやうでし
た。

うろろう木の高いところを見てみましたしそれに林の前でぴた
つと立ちどまつたらしいのでした。そしてしばらく何かしてゐま
した。私は萱の葉の混こんだ所から無理にのぞいて見ましたら二人
ともメリケン粉の袋のやうなものを小わきにかゝへてその口の結
び目を立ったまゝ解いてゐるのでした。

「この辺でよからうな。」一人が云ひました。

「うん、いゝだらう。」も一人が答へたと思ふとバラツバラツと音がしました。たしかに何か撒まいたのです。私は何を撒いたか見たくて命もいらぬやうに思ひました。こはいことはやつぱりこはかつたのですけれども。

役人どもはだんだん向ふの方へはんの木の間を歩きながらずぶんしばらく撒いてゐましたが俄かに一人が云ひました。

「おい、失敗だよ。失敗だ。ひどくしくじった。君の袋にはまだ沢山あるか。」

「どうして？ 林がちがったかい。」も一人が愕おどろいてたづねました。

「だって君、これは何といふ木かしらんが栗くりの木ぢやないぜ、途

方もないところに栗の実が落ちてちや、ばれるよ。」

も一人が落ちついた声で答へました。

「ふん、そんなことは心配ないよ、はじめから僕は気がついてるんだ。そんなことまで何のかんの云ふもんか。どっちから来たらうって云ったら風で飛ばされて参りましたでせうて云やいゝや。」

「そんなわけにも行くまいぜ。困ったな、どこか栗くりの木の下へまかう。あ、うまい、こいつはうまい。栗の木だ。こいつから落ちたといふことにすりやいゝな。あゝ助かった。おい、こゝへ沢山まいて置かう。」

「もちろんだよ。」

それからばらつばらつと栗の実が栗の木の幹にぶつつかたり

はね落ちたりする音がしばらくしました。私どもは思はず顔を見合せました。もう大丈夫役人どもは私たちを殺しに来たのでもなく、私どもの居ることさへも知らないことがわかったのです。まるで世界が明るくなつたやうに思ひました。

遁げるならいまのうちだと私たちは二人一緒に思ったのです。

その証拠には私たちは一寸眼ちよつとめを見合せましたらもう立ちあがつてゐました。それからそおつと萱かやをわけて林のうしろの方へ出ようとなりました。すると早くも役人の一人が叫んだのです。

「誰たれか居るぞ。入るなつて云つたのに。」

「誰だ。」も一人が叫びました。私たちはすっかり失策しくじつてしまつたのです。ほんたうにばかなことをしたと私どもは思ひました。

役人はもうがさがさと向ふの萱の中から出て来ました。そのとき林の中は黄金きんいろの日光で点々になつてゐました。

「おい、誰だ、お前たちはどこから入つて来た。」紺服の方の人が私どもに云ひました。

私どもははじめまるで死んだやうになつてゐましたがだんだん近くなつて見ますとその役人の顔はまっ赤でまるで湯気が出るばかり殊に鼻からはぷつぷつ油汗が出てゐましたので何だか急にこはくなくなりました。

「あつちからです。」私はみちの方を指しました。するとその役人はまじめな風で云ひました。

「あゝ、あつちにもみちがあるのか。そつちへも制せい札さつをして置

かなかつたのは失敗だった。ねえ、君。」と云ひながらあとからしなびたメリケン粉の袋をかついで来た黒服に云ひました。

「うん、やっぱり子供らは入ってるねえ、しかし構はんさ。この林からさへ追ひ出しとけあいゝんだ。おい。お前たちね、今日はここへ非常なえらいお方が入らつしやるんだから此処ここに居てはいけないよ。野原に居たかつたら居てもいゝからずうつと向ふの方へ行つてしまつてここから見えないやうにするんだぞ。声をたててもいけないぞ。」

私たちは顔を見合せました。そしてだまつて籠かごを提げて向ふへ行かうとしました。

慶次郎はぽいっとおじぎをしましたから私もしました。紺服の

役人はメリケン粉のからふくろを手に団子のやうに捲きつけて
ましたかがが少し屈むやうにしました。

私たちは行かうとしました。すると黒服の役人がうしろから
きなり云ひました。

「おいおい。おまへたちはこゝでその蕈きのこをとったのか。」

又かと私はぎくつとしました。けれどもこの時のもうしても

「いゝえ。」と云へませんでした。慶次郎がかすれたやうな声で
「はあ。」と答へたのです。すると役人は二人とも近くへ来て籠かご
の中をのぞきました。

「まだあるだらうな。どこかこゝらで、沢山ある所をさがして呉く
れないか。ごほうびをあげるから。」

私たちはすっかり面白くなりました。

「まだ沢山ありますよ。さがしてあげませう。」私が云ひましたら紺服の役人があわてて手をふって叫びました。

「いやいや、とつてしまつちやいけない、たゞある場所をさがして教へてさへ呉ればいゝんだ。さがしてごらん。」

私と慶次郎とはまるで電気にかかつたやうに萱かやをわけてあるきました。そして私はすぐ初はつたけ輩の三つならんでる所を見附けました。

「ありました。」叫んだのです。

「さうか。」役人たちは来てのぞきました。

「何だ、ただ三つぢやないか。長官は六人もご家族をつれていら

つしやるんだ。三つぢや仕方ない、お一人十づつとしても六十無くちやだめだ。」

「六十ぐらゐ大丈夫あります。」慶次郎が向ふで袖で汗を拭きながら云ひました。

「いや、あちこちちらばったんぢやさがし出せない。二とこぐらゐに集まつてなくちや。」

「初輩はそんなに集まつてないんです。」私も勢いきほひがついて言ひました。

「ふうん、そんならかまはないからおまへたちのとつた輩をそこからへ立てて置かうかな。」

「それでいゝさ。」黒服の方が薄いひげをひねりながら答へまし

た。

「おい、お前たちの籠かごの葦をみんなよこせ。あとでごほうびはやるからな。」紺服は笑って云ひました。私たちはだまって籠を出したのです。二人はしやがんで籠さかさまを倒にして数を数へてから小さいのはみんな又籠に戻しました。

「丁度いゝよ、七十ある。こいつをこゝらへ立ててかう。」
紺服の人はきのこを草の間に立てようと思いましたがすぐ傾かたむいてしまひました。

「あゝ、萱くしで串くしにしておけばいゝよ。そら、こんな工合ぐあひに。」黒服は云ひながら萱の穂を一寸ばかりにちぎって地面に刺してその上にきのこの脚をまつすぐに刺して立てました。

「うまい、うまい、丁度いゝ、おい、おまへたち、萱の穂をこれ位の長さにしぎって呉れ。」

私たちはたうとう笑ひました。役人も笑つてゐました。間もなく役人たちは私たちのやった萱かやの穂をすっかりその辺に植ゑて上にみんなきのこ蕈をつき刺しました。実に見事にはなりましたが又をしかつたのです。第一萱が倒れてゐましたしきのこのちぎれた脚も見えてゐました。私どもは笑つて見てゐますと黒服の役人がむづかしい顔をして云ひました。

「さあ、お前たちもう行つて呉れ、この袋はやるよ。」

「うん、さうだ、そら、ごほうびだよ。」二人はメリケン粉の袋を私たちに投げました。

そんなもの要いらないと私たちは思ひましたが役人が又まじめになつて恐こくなりましたからだまつて受け取りました。そして林を出ました。林を出るときちよつとふりかへつて見ましたら二人がまつすぐに立つてしきりにそのこしらへた蕈の公園をながめてゐるやうでしたが間もなく

「だめだよ、きのこの方はやつぱりだめだ。もし知れたら大へんだ。」

「うん、どうもあぶないと僕も思った。こっちは止よさう。とつてしまはう。その辺へかくして置いてあとで我われがとつたといふことにしてお嬢さんにでも上げればいゝぢやないか。その方が安全だよ。」といふのがはつきり聞えました。私たちは又顔を見合

せました。

そして思はずふき出してしまひました。

それから一目散に遁げました。

けれどももう役人は追つて来ませんでした。その日の晩方おそく私たちはひどくまはりみちをしてうちへ帰りましたが東北長官はひるころ野原へ着いて夕方まで家族と一緒に大へん面白く遊んで帰つたといふことを聞きました。その次の年私もは町の中学校に入りましたがあの二人の役人にも時々あひました。二人はステッキをふったり包みをかゝへたり又競馬などで酔つて顔を赤くして叫んだりしてゐました。私たちはちゃんとおぼえてゐたのです。けれども向ふではいつも、どうも見たことのある子供だと思

ひ出せないといふやうな顔をするのでした。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「校本宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：田代信行

校正：伊藤時也

2000年9月13日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の役人

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>